ペン俳句会　句会報（第三六八号）

令和七年四月三日（木）

兼題『花』、席題『植』

句会を、先月三月と同じ場所で開催。投句十名。出席九名。（欠席は金魚姫さん）

中村　晃也

村長の次は校長植樹祭
シベリアの訛り懐かし鳥帰る
愛犬のくさめ花粉症かもしれぬ
燥ぐ子を追いかけてゐる花吹雪
水門の陰に花びら船溜まり
剥落のすすむ古刹や花の雨

宮原　凪

でんでらや大地の恵み苗木植う
もて余し春愁と書き不眠症
春雷や黄泉比良坂あの辺り
寒椿落ちし命を水盤に
菜の花や何か良い事ある予感
春キャベツ刻むまな板朝の音

松田　一文字

道草の黄色い帽子手に土筆
植ゑ替へしチューリップの芽出でにけり
霾るや映画ポスター剥がれかけ
ひと気なき祠に降り来初音かな
花吹雪川に降り敷き筏組む
たんぽぽや魚影ちらつく川の底

大津　そうかい

住む人の顔見ぬ家や沈丁花
春風やベランダへ出す植木鉢
一斉に煌めく窓や春の朝
花吹雪吾が青春の武者姿
鎮魂の風船無数空へ消ゆ
紫木蓮朝日を受くる花万余

浜口　金魚姫

図書館の底なしと聞く蝌蚪の池
句碑の文字隠して今日の花万朶
桜鯛前にブルーのアイシャドウ
ミモザ咲くミモザの家と呼ばれをり
鱗とふ花びら纏う桜鯛
咲けよ咲け散るな散るなと花の下

新田　ゆふき

鳥影や外八文字の雪柳
遠富士の衣ゆるみて花辛夷
山吹や花弁捲れて黄をこぼし
霙降る祖の植えし山燃え尽きて
桃色に桃は咲初み富士晴朗
散る花を窓に待たせて苦吟かな

安藤　晃二

つちふるや雲間に光る夕陽影
雪柳揺れて狭庭に白き渦
椿植え花咲きこぼる幾十年
花桃の白の爆発烏山
曇天や社の杜に花訪ね
街騒や松陰端座春寒し

志村　良知

心騒ぐ訪なふ地から花便り
植ゑおきし山椒の芽やかきたまご
花むしろ子らおちこちに鬼ごっこ
心満つ推しの木は今花盛り
咲き誇る花の木の上(え)に子らの声
帰宅して様子問はるる花の雨

長尾　進一郎

浮かび来て春の訪れ知る魚
ベランダの今朝は花園チューリップ
閉校の五人連れ立ち巣立つ春
おたまじゃくし尾を振り岸に憧れる
春光の降り来る川面流れ疾し
風船を片手にスマホ幼き子

西川　知世

下校子の声かたまり来桜東風
遊歩道に水音近し柳の芽

犬のリードするすると伸びリラの径
花冷えのベンチや猫と吾と鳩と
桜冷ゆ石に刻みて数多の名
世田谷の二輛連結桜狩

次回は令和七年五月一日（木）。兼題は季語「若葉」（中村晃也さん出題）、席題は西川知世さん出題の「鳴」です。

季語を学ぶ　初学にかえって

西川　知世

「若葉」は、夏の植物の項の季語で、若葉とだけが句にあれば、木の若葉で夏の季語であるとされる。草若葉は春の季語としてはっきりと区別されている。夏の木の葉の季語として、若葉、青葉、新緑、茂（しげり）、万緑と続く。植物の項の季語は時間経過や樹々の色あいなど繊細に観察が分かれていて、歳時記の繊細さを満喫できる句の群を作っている。季節の中の移ろいに挑戦するには格好の季語で楽しい。

　樹々の種類によって緑の色に個性があり、柿若葉、椎若葉、樫若葉、樟若葉と樹々の名前を冠とする句も多い。また、谷若葉、山若葉、里若葉、窓若葉と辺りの景色を取り込む、若葉風、若葉雨、など空気感や自然を取り込むことができる季語で歳時記の例題の数もひときわ多い。参考にしたい。季語だけで五月の空気感、溌剌とした光や勢いを感じる身近な季語である。

　歳時記によっては木の名、柿若葉、椎…、樟…、など別項目を立ているものもあるが、身辺にある若葉に初夏を掬い取ることで読み手と作者が繋がる俳句の醍醐味を味わいたい季語である。

若葉して御目の雫拭はばや　芭蕉
絶頂の城たのもしき若葉かな　蕪村
ざぶざぶと白壁洗ふ若葉かな　一茶
若葉して家ありしとも見えぬかな　正岡子規
山さけてくだけ飛び散り島若葉　高浜虚子
目を病むや若葉の窓の雨幾日　森　鴎外
わらんべの洟もわかばを映しけり　室生犀星
若葉して手のひらほどの山の寺　夏目漱石
古墳出て言葉やさしや樟若葉　角川源義
風の音朴の若葉に来て消ゆる　稲畑汀子
古本の本郷若葉しんしんと　山口青邨
椎若葉わが大足をかなしむ日　石田波郷
老木に紅さす楓若葉かな　原　石鼎
犬多き坂の日暮や椎若葉　藤田湘子
雨あとの大きな雫柿若葉　桂　信子